

外平内動録

特別  
14  
1919  
764



明治四十年八月

外平内動錄

春城陳人

14  
1919  
764

太平内勤録  
春海軒八  
即出日十月十八日

176500

外平内勤録

客冬高田子母とて又余を託き内云を洩す  
一と云く自分も子母の職を就てて三年  
の十月より満七年より、来年の十月  
より換別主及二十五年一子母但儀として  
一満五年よりお南<sup>（通）</sup>北<sup>（通）</sup>樹<sup>（通）</sup>に臨む自  
分を罷めたい積りか、言を乞ふ事ありし  
健康も衰へることあり、わしは休養  
一といは異やもあふ、七年間の在職を

予我の如し自らの成就した積、餘りも  
顧みざることを以て換ふは生ずる、未  
だ十月と恰も切り上りある、後継者  
も天位を推すか明るべき、餘りも  
餘り譲りて後継者も困るべき、  
言ふに六月に前日辭去を公に  
す積と大要如幼内志を洩すに、余  
之を以て驚き且つ歎す、予我の如し  
辭去を裁さんと勉め、自分の如く  
其の紀年と君の一身上の命を云

いふ所の如し、春の病の如く且つ切の  
成りたるは、是れ利巧の如く、  
新陳代謝の端を感ずる、  
保し定むるは、予我の如く、  
大規模とすつたが、之れを、  
のりも、  
私設の如く、  
位を授けし、  
ことごとく

ハオニ流ハ流つゝ、折角大匠の端を  
路き、空を舞のすゝさの由、退くは、  
校、おし深切さ、進むは、  
二十五、一、  
此如、  
身も、  
扱、  
を得、  
切の、  
と高、  
ハ生の、

之、  
ま、  
め、  
ハ新、  
罷、  
執、  
つ、  
譲、

侍ら揃えとそつれ換子も見受けん位に  
ある而も天曾徳承後の子孫の但儀や  
方針もこれと益多決定を得たる内  
身回を辭さそと學校の前途に覺  
束さいとそ懸念の空氣が此の校内に  
充塞し、已らるる大隈伯を煩しん高田  
の再建を由義とす。昔もさうに  
此間もさうさうの曲折があらつた。天  
曾や徳山の威風を亮しに事もある  
迄もまよひ忍びたる所もさうに

保しき外部の如何も知らず平  
徳もさうな終山校長を辭して高田に  
去るといふ代、新に大隈伯を  
勤く事とさうに外部の意見も  
んれ、さうさう目出な改革と人々  
をんも見るの心もあるが、こゝにあるまじの  
手續も既に而例があるに、而して此の  
而例の渦中を肉體しては、そのまじ  
して自分があつたから、徳りのさうさう  
くさきつけとさうの必要がある換

思はん、<sup>四時</sup>こころすまをきくひまをり  
すうと本意をいふが、何れもきえん  
存しそそぬと後うまうていろくの  
評に記す或は是れを欺測す  
の事一とす、但し人よりたれか  
くつハ多る、第一の場合の  
かあから、忌憚るゝみうの  
付けとすくのみ

明治四十年八月十号 平塚廻書中  
起事  
本外史

明治四十年二月四日 時りともて日法に接る

此の神樂の由は、  
さきにも重要な件二三を  
めを辭去と披露す其の  
まきけんと同じ

全体多量の印号ある其の職を  
出る場合よく禮儀上其の  
らあんとし自らとあるの  
終つたもの何れと  
をうすしと縁切せし  
あちよおわん

たる挨拶と出づ言加ふる其由の辞職を  
留めしむるに由りて辭職せしめしむる  
く冷々活々たる体なりと辞意を聴きし  
七折るさる氣のまも又も一人一折るるを  
けりて後述者と云ふ摺りたる云々  
りとも是れも即座借ある敢て其後  
あつらんも法に果ては休め給  
と辭するもあつらんとの挨拶ありて其由  
も単純なる由一ありて是れ其意の  
以る一の職を能くしむ可なりと活

活々たる挨拶と云ふし其意を直々の教意と  
先づけり

五〇

自合と其由四原と活々しと云々辭職と  
関し其意を果ては其要に曰く其由既と辭  
意を測りて其意後述を流し其意  
あつらんも其由を留るるも其意  
に比し其意を測りて其意  
おと思入るも其意を測りて其意  
其意向つてあつらんも其意の方針を



協働して頂く必要あり。此は天命と奉  
例の信義を以てしき。其の結果として  
学務の整備する。其の場をうらむるを  
院設の事業を度々すること。其のきき  
係をさへし。天命が降る。其の四五ヶ月  
のり子あるをき。其の施設方針  
の熟考を促し。就任前にとりし。一  
応の打合を求め。此の先づ  
山を修む。其の必要あり。天命に  
余等の要求。其の修む山を  
修む。提供

天命を以てし。其の修む山を  
修む。提供

六の

今更に出陣。其の修む山を  
修む。提供

意を執し得るを断言し其の校と平和を以つて維持せざるべきものなるべし。自分の一己の解すべし。平和を保つ上は格もせむを得ずと云ふの意をもも附け加へて、俗を激しく激表を諫せんことをいふことなり。問題と云ふその我々の地と問題と申す。余と濠洲の右の如く云へり、自分も其の扱ふ扱し聊に其考ある積、然るは抑攘を以て土地と云ふ我々の地と問題と申す。と云ふことなり。此の問題を解決し云ふこと

此をいし世の快れし。是れ何れも、其のいふに極むるも也。定むる一時十葉の四むらゝの情事の扱保、差入ん事ありしが其早にその上償印済みと云ふ事なり。全部完償すべし。其の上と云ふ倫理の扱、其の扱。十月の記念会、格もせむと云ふ之んを其表すべし。北洲題と多年、余の頭腦を痛しむるものか、茲に格も略々解決の端をえぬと云ふ事ありと云ふ。

十日

坪内田原四伴(大隈任事)と親交ありし事、  
洋の中(鳩山と号羽の邸)に訪ふて高田辭任  
のつき前の三人振盪の次第を云々、且  
つ高田がその後創主以来常々難局ありしを  
リしこと、天竺の始終消極的態度を執  
りし事、天竺の親軍中人の對  
し之を愛憎ある人をも容るゝの難き事、  
天竺の老より口を継ぐ事業を萎縮せしむ  
る事、天竺の事断事を決し憲法背  
反に陥る事、等を卷尾の如く忘懐す

陳非し尚後の事、充分打合せせん(安  
心)と論じたり、余等の陳非の如し鳩  
山、曰く法人の氣をむくも際立つる程  
々の事と條件とをいふも及ぶ事、就觀前  
重要な事、と認むるも打合せと物  
めし肝要とせん、自今も今更と意図するを  
りし事、これを一週二三日や三日を  
考案し出展し、事務をなす積、法人  
安んじよと言ひ、三人共々之を  
の感、おんたり、附記す、鳩山の終り

監と高田のきり物あるが、  
耳とてやえんか、  
天命とせざるも、  
あは晴の高田の龍位を侍らつてありし  
候りも察せり。

十二日

夕刻に鳩村遊亭、坂本三郎、金子馬次郎  
中唯下、塩原昌久、池田藤一のより校同  
人の進射、小舎とつまき、海内兼、余と  
小田原病熱<sup>用徳</sup>、  
缺、高田の前の旅り

不在)と申し、  
余等四人の社会會々、  
七渡りし、  
き、  
語り、  
の、  
余、  
此、  
者

しつしつ此の府上法門人と天竺の方面の施設  
を承けてしつしつ成し得るや文子擔任の由  
りしつしつと文の如く文子の如く文子の如く  
行末の如くしつしつしつしつしつしつしつしつ  
七ありしつしつしつしつしつしつしつしつしつ  
しつしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ  
しつしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ  
校長の如くしつしつしつしつしつしつしつしつ  
しつしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ  
のしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ

か此の報告を傳へしつしつしつしつしつしつしつ  
しつしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ  
りしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ  
の校長とありしつしつしつしつしつしつしつしつ  
しつしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ  
を得しつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ  
長又其の資格を授けしつしつしつしつしつしつしつ  
自らしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ  
今も三所しつしつしつしつしつしつしつしつしつ  
ありしつしつしつしつしつしつしつしつしつしつ

その甚しきものありや若くは此情を察  
る鳩山校長の進退を乞ひ寧ろ天竺を  
と校長の位地に進出の元実其の校長の  
職を行ハしめんこと、こゝに於て天  
竺の天竺の才を疑懼する論を專ら忽ち  
論を収めて根本的組織論を一場の大  
議論とするし終に校長の上へ徳ををき  
大隈の政黨首領を辭してんことを  
しし徳を徳ある勲くふしとの論法を  
こゝに至る

十号

此の多岐にわたるは内田村(田舎)の病中(日  
天竺を徳田所のそゝつめて四のこゝに  
交差し、関係する根拠を為すは内田の口を  
切し大隈の園する事と陳す、天竺のこゝに  
校講何れをの思惑を思念しそゝりて授  
ふり元受けをそゝつては内田が厚く此の  
人を拒す、異議ありと陳すや天竺も程  
のりりあること、と此とちうして其の  
とゆゑ、そゝる位をぬかちうと、と

言ひ出たりし余も利権辭表を翻し得  
ずと言く—の天啓と云ふ女の傳を傳うし  
女の位地を授けし事もある留位せざるべ  
き事と言ふ余も利権不可能なる事  
を承けし事—一轉重なる事協成の秘  
あり余も言ふ監の更迭を極く一語一  
字を要する問題ありそれを校長と  
従来のことく名譽醜の事の上の事半  
半と云ふ—一語一語の事の問題あり  
事ありしが未だ言ふ事ありの事と云ふ

と位を極山と主物とする事ありあり  
りたり言ふ位と主物の事あり物あり  
位を極する事あり校長と云ふ事あり  
おまじし事あり校長と云ふ事あり  
山あり事あり事あり事あり事あり  
自分も言ふ事あり事あり事あり事あり  
事あり事あり校長と云ふ事あり校長  
と云ふ事あり事あり事あり事あり事あり  
事あり事あり事あり事あり事あり事あり  
事あり事あり事あり事あり事あり事あり

況の端を際くしもの也其右の三つしものも必ず  
すも從え慕え、才一入か、その堅くしつ  
又、左も、右も、この人、  
しつ干渉を受く、  
其、後、  
の、  
山、  
辭、  
し、  
思、

天、  
も、  
も、  
其、  
隊、  
し、  
し、  
余、  
余、







余がうけしんを試みるも敢て辭する事  
あり

天竺の如くせんを我の事とせん方よりん  
そゆ事も校書とせん方がきり易すといふ我  
等の便利を後き譲りて世よりすすめん  
あの人古き校書の調を尋ねるを敢て敢  
てしある事いふし、係しそゆ事の調を尋  
せしるから流馬承知するむあつて、唯に  
うゑの事も我敢て言し、今迄の扱は切  
り其を敢て行ふこと出果る事いふも

知れぬと一説を漏らしん

十

天竺と云ふ校書今や天竺修山師の類書を被  
して回く其の抄撰を其の修山と師の  
師海と云ふきえが其の意の如くを承けし  
る事と利唐師の意を承けしを認めたり  
修山の事いふ今罷めさせん事を備わ  
り但し概念を承けし事と姑け  
かと天竺又曰く修山と云ふは師の  
事あり位師中一師を辭せとも其の難

かりしと天竺の抄を更にもよる故にその語  
おとせしと要領を得ずしと云ふ  
此の要領をいふは報先、平治しと云ふ  
是と思へしと時高の抄をいふ  
と云ふ事なり其の由をいふ天竺の語  
この得果すると思ひ此の報先をいふ  
てと目今に抄の語をいふ  
其後おとせし

此の由をいふと云ふは抄の事なり此の問題の  
本行を報告する事なり其の由をいふ

いふは天人の語なり此の校長を記す天竺  
を校長と云ふは抄の語なり其の由をいふ  
此の抄の報先をいふは抄の語なり其の由をいふ  
の語なり其の由をいふは抄の語なり其の由をいふ  
依り余を更しと天竺の語なり其の由をいふ  
ありしと云ふは抄の語なり其の由をいふ  
要領を得ずしと云ふは抄の語なり其の由をいふ  
と云ふは抄の語なり其の由をいふ  
字の依りしと云ふは抄の語なり其の由をいふ  
求せしと云ふは抄の語なり其の由をいふ

べしと別れり

二十〇

学校に於て高田と今す高田と天竺と今活の  
要を報す曰く鳩山と任地の中間に在り任  
地中一節と申したるも動し毒とすと天竺  
の混一地あるは誠之任地を云つては  
自今と鳩山と任地を異りし自今に  
そ任地の中間に在りも鳩山の任地を事  
十一月を以つて満了を告ぐと云ふを  
依る天竺と云ふも流しつと云ふ自今の天

竺と流しつと云ふも自今流し不在中間  
地と多少の差違あり市嶋の報するを  
せば鳩山の校長と宛めし尺を校長に推し  
改め大隈信を総裁とすさ一人の命  
にあり越自今に於て異議なきこと  
事なり子找り論事なりと云ふ物かを  
事ありと云ふ得果すると思ふ  
自今かへくは監事校長の下にありし  
経験と云ふは事ありと云ふ物かを  
物かを云ふ事ありと云ふ校長

口校の権を行ひるるも外は對しては各校  
の代表あるを校長たる例は高が教育會  
派といふ早稲田大学の代表ありしは校  
長と其の會員誰れを考ふるやと其の校長  
を考ふるは校長たるが事あること  
せんば答ふるも其の校長代表の事と  
考へ得る也 事を附したる人を校長  
に考へは二名の校長あることを期待すべ  
し 如きは校長と言ふ所ある名を一々知ら  
せんば挨拶せしめたる冷然と考へたること

従つてこれらある如き事皆ある事  
其の實権を以ししる外は對しては校長を  
代表する不都合の及ぶ事あり 且自分の如  
くを以てする勸む事ありしは校長  
と考へるを戴くことありしは校長  
の事ありしと  
鳩の如くも自分の如く 断を以てする  
校長たるも自分を以てするを考へる  
山と考へるは其の校長たるを以てする  
ことありしは校長たるを以てする 政次

時より校を幹事と校中の回を大  
概の事を決するが終を校長と幹事の  
職を分るる事ありしは伊の権者  
用ひる事も職の上校中を回つて  
要せし也而して其校を社団法人とし  
此多分を組織しし事也  
儀事と頻り也  
の専断と非難するの謂はんや  
大隈各を協賛しし事  
大隈各校と云ふ事  
大隈各校と云ふ事

今進んで大隈と協賛しし事  
予指す事と云ふ事  
之の事も其校の微弱ゆへに  
他の覇権を脱す必要ありし事  
校の親撰大、向と協賛し仰ぐも人等物を  
目して大隈各校と云ふ事  
つ獨立を言ふ事  
高田が天中と云ふ事  
大隈各校と云ふ事

廿二日

天竺の鳩山任期の事と方調や黒人と江文也  
リ〜のつき此の幹事の事と折して方調や黒  
〜の事折の事〜天竺を言ふ事其の折に折を  
書状を平し〜天竺の事〜云々の可也任  
期満りの事〜此の幹事の事〜社員の事〜  
是る事〜此の事〜と此の次大  
隈任を総出と〜此の事〜此の二回日事  
の〜の事〜此の二件〜何分其の  
来し〜切ん〜の事〜大いの議論を  
要すと書取し其の事〜別れ〜

三大要件の鳩山と解任を勧告する件を任  
期満りの事切進し〜の事〜天竺の事  
此の事を決し〜の事〜他の二要件  
(第一回其の事〜此の事〜)と云  
由實又此の折子も見え此の事切進し  
〜のつき此の事〜の事〜  
リ〜の事〜此の事〜と云  
も決心〜と云〜此の事〜朝  
日天竺の事〜此の事〜



、出勸をひきよめて、  
二、  
みり

おとし

自分もなが天竺の不決断を答り、  
業を徳に推戴し、  
是より、  
信するは、  
違ふは、

唯此の校を、  
せがと冒ぬと

其を、  
四、  
自、  
も子、  
あ、  
拙、  
兩、  
君と

を以て之れを再びしるるを危ぶる敢て之を現  
るべき自分と全体此の善業集の事と大関  
係ありし抑も自分と幹事の代に於て此心  
ありしも果さざれば其心は自分ハ聊か  
成りし事ありし概してゆきし金や仕物  
の客人心路も一軒此を以て試み  
概して於て先かこころを以て之を成るの案  
も考へし之れを是礎とし全圖は三十万  
圓を算するの案も得しこころは始めの善業  
を行ふ事ありし以来、多くの功を以て於て

自分と関係しるるを以て、人の安心を以  
てしるる試みも善業集の事ありし  
~~下~~ 善業集の事ありしを以て、人の安心を以  
てしるることを以て、人の安心を以  
てしるる試みも善業集の事ありし  
き詳細陳述ありしを以て、人の安心を以  
てしるる試みも善業集の事ありし  
的の方ありしを以て、人の安心を以  
てしるる試みも善業集の事ありし  
（自分ハ天のしるる善業集の事ありし  
ハ此れを以て、人の安心を以て、人の安心を以  
てしるる試みも善業集の事ありし

自分と異なる道をして亦二回夢集をあるは  
その我の認識と捨去するに人々をあるは  
むらむらと退へて守るう程にもじむ  
を得ずと説きするの書も其のあり亦一  
回の夢集其のまゝとほつふ<sup>○</sup>建集其の  
時條智く使用し終るるをうて早急  
之れを補填するの必要ありある人々  
を継ぐともも此の責任を捨つて<sup>つ</sup>其  
の市井を覚悟するの<sup>つ</sup>が是れ校是る  
又の杜くるを許さぬとそのまじり也

其のまじり夢集と非むるを難くする属する  
亦二の志を其の行のありせん其れ現状を  
維持するに難し之れの方使して其れ  
ことき<sup>○</sup>即ち家を<sup>○</sup>其れ<sup>○</sup>戴く<sup>○</sup>  
じむを得るに信する伯の<sup>○</sup>即ち<sup>○</sup>其れ<sup>○</sup>お接  
する<sup>○</sup>即ち<sup>○</sup>其れ<sup>○</sup>大なる<sup>○</sup>あり  
亦二回夢集<sup>○</sup>其れ<sup>○</sup>自分<sup>○</sup>の<sup>○</sup>任務<sup>○</sup>に<sup>○</sup>信  
ハレ<sup>○</sup>命<sup>○</sup>する<sup>○</sup>の<sup>○</sup>夢集<sup>○</sup>を<sup>○</sup>伯<sup>○</sup>の<sup>○</sup>即ち<sup>○</sup>其れ<sup>○</sup>  
輸う得る<sup>○</sup>と信する<sup>○</sup>夢集<sup>○</sup>を<sup>○</sup>非むる<sup>○</sup>  
こと<sup>○</sup>じむ<sup>○</sup>を得る<sup>○</sup>と<sup>○</sup>は<sup>○</sup>伯<sup>○</sup>を<sup>○</sup>其れ<sup>○</sup>戴く<sup>○</sup>

くも六じちを得ずと断ずるの外うし流んや  
す扱のゆえ侍りの単り甚き喜か集る止まら  
ざるをや

自分の海やる要方を在のこころし細道を  
くまのこころし其を喜か集る区域方  
おもひくし天の心を自分より喜か集る校  
く喜か集る喜か集るを成りて例を引き  
自分も細く喜か集るを出来さるも方面  
の信つても強き未試をゆきと云い  
伯と流れとて一説を云く云く伯

を政治的人物とて随つて伯の路や思ふべき  
政治のやとんは伯の力や言附るべき  
伯の路や上るの時何の報酬をせんを  
伯と出しやある者せん伯流の政  
首領を辞し政治の上をせんはせん  
以上を伯の勢力と云ふのこころと云ふ  
余もせんを辞し伯を政の上の首領を辞し  
せんも政の上関係をせんはせん伯の勢  
力範囲を一層の望むらん今故政の上  
係の取扱を或得減らんせんも政の上

園傳<sup>の</sup>、あゝ、庭接<sup>に</sup>、壽<sup>を</sup>し、あつたあ、  
却つて祖<sup>を</sup>を<sup>ぬ</sup>ぐ<sup>る</sup>、思つたの、  
ハ、單<sup>は</sup>、改<sup>は</sup>、あゝ、  
の、  
思<sup>は</sup>、  
天<sup>の</sup>、  
さ、  
不<sup>得</sup>、  
の、  
—

三月三日  
其の~~書~~余の家<sup>に</sup>、  
甲<sup>と</sup>、  
一、  
心、  
と、  
真、  
難、  
也、

生業は由朝する筈也而し七末年かの  
留學を以て未だ決定しそむ此の機會  
に臨み二三人の留學生を以て去るを以て  
二校の留學生も洋行費は若干と  
受けしし中自分が行くところには  
先づ一萬圓の費用を要するべきがを  
論自人もこの因位を以て校の積也余  
は二校の今よりいへば君は二校の  
大なるその梅を君に賜へお前  
仕向をのさつるを得すとすへ、此は七坪

内とお述べしは、何の由もあらざりし君  
に洋行費を賜ふべしとの意を以てし、  
余は、~~洋行~~洋行を希望し、  
いふまでも洋行を望むるは、校の爲  
め、君を煩ふは、助るべし、之れと謝禮を  
し、自から別問題とす、と答へ、  
早く自分と別する校、謝禮を以て  
せしむ、洋行させ、出来んは、  
是れ、余は、~~二校~~二校の  
中、七社、中、~~二校~~二校、  
何人も異議

さういふと高田を

四日

大隈佐銅像某建設設計の件—  
任の去るを徹するに必要起り高田と打  
連ぬと任を清くその主用を清くし高田  
が始終交先一件—  
高田と交先の始  
末を報告し—  
且つ衆議院鳩山：校長の  
辞任を清い日天竺を校長とする—  
更々  
は伯<sup>三</sup>徳<sup>三</sup>裁<sup>三</sup>を<sup>三</sup>ん<sup>三</sup>こととを<sup>三</sup>布<sup>三</sup>告<sup>三</sup>する  
方を陳ぶ、伯<sup>三</sup>徳<sup>三</sup>の<sup>三</sup>鳩<sup>三</sup>山<sup>三</sup>の<sup>三</sup>大<sup>三</sup>隈<sup>三</sup>と<sup>三</sup>校<sup>三</sup>

長を罷めしむらう、  
自人のまき  
の為とあるは  
高田の思ひ出  
る看取と  
るに敢て辞  
するあるかと  
直らふ快  
流と云へん

五日

午前九時天竺余の家へ訪ひ来る  
高田  
三時三十分  
天竺の其の自命するところを  
余に其の任を引渡さうといふ  
一考量  
を要するに幹部の便也

鳩山ハ校長と罷ちるも異議なしと雖も依り  
自命を校長として其の任を継承する積り  
ふがこゝに君の同意を得たきと鳩山を  
更めて顧問として一儀あり

学校の施設に絶えず其の力を創設以来の  
をへんその為るは自ら承るべき堅苦  
と雖も一はも事々々々其の任を  
承るる自命も亦承りし年久事と雖も  
其れ又其の業を承るべきと認るる  
を得しとありし自命も亦承る心甚しく

思ふ

鳩山も自命も充分の任を承る自命を助  
けやんと其の任を承る言ひは其れは  
謝絶の事なり難く且つ自命も単獨  
の任を承る心細くも其れは顧問とし  
て一と思ふの也

天理を承る維持員中一人自命の任を  
承る積りあるを承りしと承りし其  
の人の為人を称揚し且つ其の人の財力  
家産は維持員たるべき自命の資格





勿論も位高きもの門下をもつて以上は  
強う一人に海をうらみかねば頼むべき職を  
居るものこそ、随分と位重く事ある  
場所を随分と遠慮する、役目さうある  
事の振舞い権高の位地、存心は何人も  
羨むし時々の~~世~~世を待てんと  
するの情もある、さうして他人を加へん  
事、これ未だ果す能うする人も  
上格衛を得るの難きがある也、然し君の云  
ふこと、侍の一人を尋ねては、~~同輩~~同輩

いぬが沸騰せん(元)の、あつても、  
高合(高合)の、  
成し得る、  
成し得る、  
成し得る、

鳩山の校長を、  
あつても、余今あるの、  
上りた、  
同輩の、  
き感、

と志望するに當りては、  
あつては、  
いふ言を得ず、  
或る事、  
来る人、  
以て、  
却つて、  
心、

事、  
入る、

余、  
の、  
く、  
の、  
語、  
時、  
甚、  
賣、  
ふ、  
何、

眩般の夫と得た事と愛おむつ且うし我々  
と若坊を呼ぶしと様らぶ、外と政府を  
并に少教系の翻弄するもさうゆと  
堂のなれと陰えりしと牛牯のく一流  
さう徳山の未來とぬるさ甘う折ること  
町のの狀態言ふ危殆の地位に存  
ぬるさその我々政治と潤せぬとさく  
必也敗徳の人を堂とすさくもの主物と  
さうとさくさくさくさくさくさくさく  
さうとさくさくさくさくさくさくさく

漢士論義を以つてその其の人と對する  
酸と熱罵とも往々其の得意の文章を以  
つて拂掃し得ず勅諭は其人の怨恨を来  
すこと往々さくさくさくさくさくさく  
の難を言ひけさうしと政治上の程もさく  
のたしと可さくさくさくさくさくさく  
り来つたさくさくさくさくさくさく  
評判の杉柄、何人うさくさくさくさく  
ふきさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさく

元天會と嵯峨の自統統して高向なる事や  
嵯峨の政治的人物より其の流を操縦  
すべしと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
也と君の謀を平撫すべしと云ふ事と云ふ事  
鳩山も今此の世の事と云ふ事と云ふ事  
願ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
も猶敷之なる事と云ふ事と云ふ事  
いんてんも結果も云ふ事と云ふ事  
の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
し或も天の位地を奪ふ事と云ふ事

おん余が人の為なる不利なる事と云ふ事  
也、今や法の出入を推す事異議ありし事  
も及ねと云ふ事と云ふ事と云ふ事  
くは同義し難き事と云ふ事  
此の一段の議論も天の事と云ふ事  
激しき事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
つての事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
人の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
と  
此の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

とて件と中二回をまゝ若集の件の如く  
天命との確たるものなきことと云ふ  
余と天竺との後沈吟多し終は一大決心  
と云ふ、天竺と利唐高田を継承し一休  
ゆゑの累はあつた、自分より可憐いの人を  
お手ぬり執持の事を為さんと云ふ、狭隘  
の最たることと云ふ校のちまを信託す  
可し、此上なきことと云ふ高田を留め  
口の事、我々が慮らば要する一事、終は  
龍の方、恩徳を信託し、件と云ふ

行見うきとあ手ぬりの事、終はあふり  
あし、が、此上なきことと云ふ高田と  
題するもの、そ等社負二三の州、決行  
し、高田の事、一も終は二方、  
一とそ等社負の事、終は一と云ふ  
この決定しき

五の午ぬ

高田をその後、つを午前、天竺と今任の  
始末を報せ、高田の事、終は一と云ふ  
然し、一と云ふ、高田の事、終は一と云ふ

くまの狭隘さうさうと思つてさうして天竺  
のあつめくも母とはこの校の平和を登  
任の即り破らん、吾んわうの位を辭任を  
悔ひ、おのをも今う位をたあ何の能く能く  
唯此成行の位する外さうん、余も如動  
きとあう、つら動さしおの、井三入  
と向つて辭任する莫んことを望め  
やう也、余も又の辭任に正を得<sup>た</sup>以上  
成さうて天竺の位をおの位未及念の  
方針を遂行せし免さうと前日未力

つとる免れんもいつと物に流して其を  
勝ちおとまふ多物も、自分も最早堪忍  
成らうとて、今日限り天竺の位を  
交渉ハせる積也、高田の位も一カ一  
辛抱し給へ  
高田も改めると自分も先き、社名會に於  
て辭任の事を洩らし、いんも未此位の用  
うも公然之を生けなくさう、あう、あう、  
のあうをつあき、いん辭任をいん、余も  
其お、天竺と交渉の次序を報先せん

此日夕刻自分の決意を高々し坪内にお任  
せんと訪問する不在を果す

二〇

坪内早朝とゆわく去月十五日坪内と天竺とを  
訪しし次第及ばず天竺と交渉の次第を詳細  
に報告す十五日以来を余單獨して文  
渉をつづけざるを以て坪内とせしめ  
ゆゆゆと承知せし天竺と云ふは余  
と告げざる要領の第一回坪内と天竺と  
訪しし時の挨拶と云ふは余と云ふは

と云ふは坪内と一語を交したるは坪内回  
く天竺と接したるは余と云ふは余と云ふは  
天竺と云ふは坪内と云ふは余と云ふは  
余をさ、んたうと云ふは余と云ふは  
の折天竺の為人と云ふは余と云ふは  
余を接する材料と云ふは余と云ふは  
余の後の行末をあきらめたるは天竺と云ふは  
余の心をくつと決意の大略を告げ坪内の  
意見を徴したるは坪内と云ふは余と云ふは  
と云ふは余と云ふは余と云ふは余と云ふは



本々  
又刻も

同校の報をとりし、（丹中）丹中東の言を

を徴せんと思へし、（丹中）丹中東の言を

高北純修真源をとりし、（丹中）丹中東の言を

ゆきなんば、（丹中）丹中東の言を

十日

又刻も、（丹中）丹中東の言を

高北純修真源をとりし、（丹中）丹中東の言を

ゆきなんば、（丹中）丹中東の言を

丹中東の言を

の理由も詳細な述べ、其の政令、（丹中）丹中東の言を  
たして、（丹中）丹中東の言を  
天竺との交渉の沿革を、（丹中）丹中東の言を  
其事多き、（丹中）丹中東の言を  
りし、（丹中）丹中東の言を

十七日

午の一時、（丹中）丹中東の言を  
而、（丹中）丹中東の言を  
其の、（丹中）丹中東の言を  
い、（丹中）丹中東の言を

案と云ふを推考する

其の又命を以て何事か後を以て唯れ奇怪  
なるまき方の一身よふとき流説の盛んを行  
はしむるなり或る回高田を在任中一校  
全を科し又回高田校を築き交るゆゑと  
上二歳を創設せりといふ所の不都合あり  
り流説を以て高田校を造りしといふこと此際  
高田校即由の喧傳し事務多しといふ事  
或る高田校の推考なること  
傳ひん事を以て高田校の後に立てらるる



是れもといふこと流説を以て早稲  
田の向ふと流説の向を以て高田の一角を以  
てしむる事ありしなり余を以て北  
の流説を以てしむる事ありしなり  
其の出子を探ししなり何んか流説を  
出さるること判れし故に高田山の傍  
敷ありしゆゑを以て言ひ觸る事ありしと  
言ふ

初る流説を以て一矢の信をもあせしむる此の端  
今之を以て其の流説を以て高田校の人心動

乱し失体と外はあつたといふやうな  
校地のゆゑも黙つておるやうな  
且つ鳩山の政界に於ける醜行も  
外に云々〜此は某派の流（皆云々）  
（是れ属するもの）云々一説を  
云々、活字印刷の位地ある家々  
と共におかしく黄白に悪く、権勢を  
う得んとし〜政治家の常として云々一  
と提げし甲乙あるを云々〜  
云々の世流を云々〜云々の沙汰の如く

あつたや

鳩山を除くこと今も校の体面上に  
と思ふ併し鳩山の政流上の敗  
上は潰れかとう〜且〜持〜と  
〜後来より校のたのむ根を始  
大寺あり、云々の辰の路、  
托し向〜学校内の黨流を  
の情勢既に甚し〜云々の事  
〜云々の事、云々の事、  
云々の事、云々の事、  
云々の事、云々の事、

新しと修るも也所々々修らんとす我の筆を  
こ向の二連の二を原を捕らるる極々  
中其高の目と之路の和と陰の地排拵  
し、出版部の仕末の所々々社々々々公  
私決し夏きさるる人々爲しては  
も高の目が出版部と挿奪しとるる  
らめくさひ解らし天の目も同如年々高  
田が修る所漸々高きを候必修らぬ  
不決の念修るるを看取して出版部の事  
あつて以来晴るる日と何事も五人候

瀛しと高の二を原と形あり而して  
今四の事々々々修らんとす我の  
地ををあらりしと人堂を爲すの  
形修るる事々々修らんとす我の  
の地ををあらりしと人堂を爲すの  
天の目が修るるを修るる事々々修らんとす我の  
校々一時修るる事々々修らんとす我の  
且々々修るる事々々修らんとす我の  
今至つてと今二十五を修るる事々々修らんとす我の  
校史を讀し後未修るる事々々修らんとす我の

この金をむくく長く直してゐるの  
此の一事もあつたらぬとて黙して  
得る也

坪田河内同感するが故に、  
あつたらぬとて黙してゐる  
向ふも放擲し、そのうち  
のゑり、  
大分、  
天竺、  
幾んど敗る、

高田のあつたらぬとて黙してゐるの  
病状保長、  
くせは、  
自分、  
一、  
その方針、  
ま、  
史を、  
大分、  
ふも二三年、

入り出す方面の地位を復するゝあつんと  
 欲せしが堂を撤去し高の由らふんとも  
 する程とも叫び位地を奪う事畢し  
 天の亦容易に位地を奪ふこと無らん今  
 一として思ふは命自らが高の由の辭位に  
 賢味を志ししはとも輕卒一たりし  
 世に於て生う行く上とこの扱のたえん天  
 皇憤を為さしつる一うかす可扱のたえん  
 を殉せしと決しと死のするあふすと  
 二、三程を兩人念開の業を講交し結為

左の一案を得る

事最に造りし原開の及を唯此一あり  
 つゝ大隈侯のそつと高の由留位を初  
 め田の天命の節一しつと候も思  
 振の説諭をそつとの外あつて一うか  
 復たしん位現状維持の外他業あ  
 りとす

有人は、思ひ出さるゝと扱めし重んずる事  
 折角に進行して、更さし治を杜絶せしむ  
 る程に高の由の迷惑なき其れあり也

推察せざる可しが終つて天のたまひを  
んんんなる自為の編める脚もさうと  
高のさすまは此の事を聞かざる世余を  
自かゝるを清したる後高のさすまは  
わしも此の事さうと云及せしが是し  
甲子と及はせんことを実んじしう、是れ  
と高のさすまはししぬるさすまは  
七辭せしむる元候を言ふはすまは  
いそ可くさうとあると聞かざるは  
契了

終つて終つてすのいをさすまは  
惟おとさすまはを留候とすまは  
止め終つてすまはさすまは  
歎かざるは山を降つてすまは  
く生さざるは山を降つてすまは  
山を降つてすまはさすまは  
いそと現物の候とすまは  
さすまは、終つてすまは  
染むるさすまは、終つてすまは  
校書と終つてすまは





煩る事軍も~~も~~勝るも~~も~~取ておそき~~も~~あ  
が、若し天竺~~も~~一~~も~~聴くも~~も~~何~~も~~を倫  
煩る者~~も~~直る~~も~~的~~も~~訴ふ~~も~~命し~~も~~自  
七~~も~~ん~~も~~さ~~も~~言~~も~~さ~~も~~あ~~も~~め~~も~~の~~も~~あ~~も~~る~~も~~は~~も~~道~~も~~し~~も~~  
○~~も~~眼~~も~~を~~も~~く~~も~~な~~も~~も~~も~~此~~も~~の~~も~~物~~も~~を~~も~~と~~も~~自~~も~~分~~も~~も  
○~~も~~思~~も~~ひ~~も~~お~~も~~自~~も~~分~~も~~の~~も~~思~~も~~ひ~~も~~の~~も~~あ~~も~~る~~も~~天~~も~~竺  
○~~も~~話~~も~~し~~も~~も~~も~~え~~も~~た~~も~~し~~も~~、又~~も~~の~~も~~言~~も~~え~~も~~た~~も~~あ~~も~~る~~も~~  
○~~も~~問~~も~~ふ~~も~~、余~~も~~何~~も~~も~~も~~ん~~も~~と~~も~~む~~も~~も~~も~~あ~~も~~る~~も~~  
○~~も~~言~~も~~え~~も~~さ~~も~~う~~も~~眼~~も~~を~~も~~く~~も~~な~~も~~も~~も~~此~~も~~の~~も~~物~~も~~を~~も~~と~~も~~自~~も~~分~~も~~  
○~~も~~余~~も~~勿~~も~~論~~も~~新~~も~~く~~も~~さ~~も~~す~~も~~と~~も~~あ~~も~~る~~も~~も~~も~~、余~~も~~

於~~も~~此~~も~~時~~も~~と~~も~~異~~も~~存~~も~~さ~~も~~し~~も~~、~~も~~此~~も~~際~~も~~君~~も~~の  
三人~~も~~の~~も~~一人~~も~~と~~も~~し~~も~~と~~も~~反~~も~~逆~~も~~的~~も~~忠~~も~~を~~も~~思~~も~~く~~も~~  
○~~も~~言~~も~~え~~も~~さ~~も~~う~~も~~、君~~も~~を~~も~~言~~も~~ひ~~も~~自~~も~~分~~も~~と  
○~~も~~其~~も~~の~~も~~天~~も~~竺~~も~~を~~も~~訪~~も~~ん~~も~~さ~~も~~う~~も~~、~~も~~あ~~も~~る~~も~~も~~も~~、~~も~~あ~~も~~る~~も~~も~~も~~  
○~~も~~余~~も~~、~~も~~獨~~も~~り~~も~~、~~も~~交~~も~~流~~も~~の~~も~~向~~も~~も~~も~~  
○~~も~~事~~も~~、~~も~~君~~も~~の~~も~~関~~も~~與~~も~~さん~~も~~、~~も~~、~~も~~  
○~~も~~日~~も~~休~~も~~の~~も~~侍~~も~~ら~~も~~し~~も~~、~~も~~天~~も~~竺~~も~~日~~も~~南~~も~~わ~~も~~此~~も~~際~~も~~  
○~~も~~と~~も~~君~~も~~、~~も~~獨~~も~~り~~も~~の~~も~~訪~~も~~ん~~も~~、~~も~~し~~も~~却~~も~~つ~~も~~て~~も~~、~~も~~  
○~~も~~い~~も~~ん~~も~~、~~も~~但~~も~~し~~も~~朝~~も~~来~~も~~の~~も~~決~~も~~意~~も~~を~~も~~繼~~も~~ぐ~~も~~ん~~も~~  
○~~も~~あ~~も~~る~~も~~も~~も~~、~~も~~あ~~も~~る~~も~~も~~も~~、~~も~~も~~も~~更~~も~~さん~~も~~と~~も~~困

るふれりる名に断行を要するは  
 天智と今迄の結果すの遷りな流  
 一とめりるが、此の流一と流  
 一とをよと陳ぶる、坪内曰く流、此  
 の流を自分と自分かと思ふを有む  
 陳る流、そのを自分と信せんよ、余曰  
 くそのを論するは流を人の流儀  
 又考ふべし、併し流儀とをせむ  
 其の印とと深更に流論して別ふ

佳かに

この記号は、明治四十年の夏子供と建れて  
 あり平塚、五六日居着したる折、物に  
 かせて起すしたるものなるか、是れ全く同  
 分の性癖から出たるものこと、今日之れ  
 を他につ放して置きんかとは尋ねたもせ  
 たりしをなす、是れは記する子のことは  
 二傳らざる告白にして、昔批判の辭に

こ又心平なるとは、いふまでもない、只其れ  
完結を告げず、坪内君が其行の委滞を感ず  
心く、天野の妻へ往訪したる事にて、振草  
しむるのみ、其後の経過を茲に述べる。

坪内君が天野の妻にて芳法せる内容は今記す  
に存してなりが、坪内君は天野の妻の母を  
自分方に立寄らうと、其時の坪内君の病子とい  
ふもの、あるで、全員の肉親を非難して、其  
最の存存ありつと、是ハ只事なるが如く思つて

さへてみるに、天野の坪内君は、其れを  
いふもの、其れをいふ、其れをいふ、其れを  
あつて、天野の君が行を知り、其れをいふ  
おかりに、其れをいふ、其れをいふ、其れを  
ある、其れをいふ、其れをいふ、其れを  
平かなる心持を以てし、其れをいふ、其れを  
附かつて、其れをいふ、其れをいふ、其れを  
を始り、坪内君も心得て居るか、其れを  
色して其れをいふ、其れをいふ、其れを

（注）其れを指す

かきると文種か治まりぬ、自分の主業する又  
神一科か了らぬも君は法目を放言して  
情情として分ちて付たとのとるる、其  
故に、以上の際なきし、徳の人を以て此法目  
を、教是か立をぬ、字様か善端する、言田を  
き得てして盡くする、寧ろ海軍してはたつて  
英らうゆえに、と縁か定まつをなす、即  
日の、五人お携つて大隈を初め、二日後のあは  
将軍と業するこ、天啓なかるは地裁徒同共、

是つて往けるものるは、其業は是非か  
の教を認めると言ふ、言田を信後せしめる  
り外なき、附て、佐倉(其言の伯言)より  
言ふ、おして、地位の初言をして貴をりて、  
へを、何る、去るに、地山の行初つりて  
大に、言つて、念うら、時、お人の申立つるを  
玉極おしるりとせら、其は、其心を喰つて  
突をも、喰つて、さるる、上、夜を、録す、言を  
あせり、言田に、言田、言田を、地位を、初言



も存いかに、今更のこども園連して居るが内  
々火七と主くと謂はれ、其又書つたが家の和  
夫の姑夫二つりとい道徳玉座のともある、和  
久に在りて新しともスる後ニあしきも、何事異  
志を抱く者かいな、事の成る玉つるのほ全  
く天降り疼痛ニ出つるものにて、和久に在り  
ゆやたすニあしきまへと告白してあつた、斯く  
て言ひ果は左肩の痛位初巻ニ感涙し、西の富  
越して後足のか行、あつた、高き新ニ大隈を

（和久）

書を然るに推戴し、己には学むとして亦二期  
基金百廿丁判の著書も標榜し、苦心慘澹と  
うしく百廿丁判ニ著する、標榜と集め、理工科も  
新築し、女子校の御礼の然るを感りして、今  
日の如く、後岸隆盛の基礎を心づき、ゆるき  
時大隈を要する然るとしての推戴ニあつし、亦  
二期基金著書の訂正ニあつし、然るに於て將  
社主を固執主張する天降か、当時よりハニ  
度より三倍の異案標榜する時とありて、己

長ニ推存する音ありぬを、  
推挙として御座  
されたる宗理にもまゝ、  
坪内らもソレを  
とひまゝか、  
天啓の流儀に  
何時も裏を画く病  
かき、  
依て今迄の  
ことのぬきも  
常の如し  
浮世さう、  
心ちのまゝと  
まぢのひ、  
世間身と梅子  
の味も存さず、  
かしく  
味を  
しまつて  
張  
る。

